評価に用いられた「ね」と「よね」の配慮機能

キム オギム (誠信女子大学)

要 旨

本稿は終助詞「ね」と「よね」の「評価」用法を対象としてポライトネスの観点から考察したものである。その結果、終助詞「ね」と「よね」は、聞き手への対人配慮の機能を有するという点で共通しながら、両者間の微妙な差異があるということが分かった。《賞賛》の場合は、「よね」より「ね」の方が多くみられた。このような事実は、「よね」には例文(2)のような制約があることと関連するものだと思われる。また、その出現状況を見ると、聞き手への２度目の評価、つまり再評価が「よね」を伴って聞き手に伝達される場合があり、その点で「ね」と異なるように思われる。《非難》の場合は、「よね」の代わりに「よな」が用いられるという傾向が見られた。終助詞「ね」と「よな」は、反語的な意味を有する「よく」とか、ぼかしを表わす「も」とともに用いられ、否定的な評価を婉曲的に示したりしていることが分かった。このような事実は、リーチの「是認の原則」とも関連するものだと言えよう。

キーワード：ね、よね、ポライトネス、賞賛、非難

1.はじめに

終助詞は従来、文の末尾について、文の表わす命題に対する話し手の判断、疑念、同意、あるいは話し手が聞き手に対して行う伝達、確認、禁止などのモダリティ情報を担うものととらえられてきた。なかでも終助詞「ね」については、従来いろいろな見解が出されており、「同意要求」や「確認要求」以外に、例(1)のような「コメント」用法がある(大曾1986)。この場合、「すてきなブラウスです」のように「ね」をつけないと、話し手が聞き手に自分の観察(判断)を押し付けているようで、丁寧さに欠けるというところから来る不自然さが感じられるとしている。

(1) すてきなブラウスですね。

次例も、話し手が聞き手の領域に属するものについて「コメント」する場合であるが、(2)では「ね」は可能だが、「よね」は許容度が落ちる(下山 1995)。

(2) A :先生、完成したんで持って来たんですけど。

B1:ほう、これはなかなかいい出来だね。

B2:?ほう、これはなかなかいい出来だよね。

しかし、韓国人の日本語学習者にとって、話し手が聞き手についてあるいは聞き手の領域に属するものについてコメントする場合に使う終助詞「ね」や「よね」は、なかなか使いこなせないものの一つである。それに、「ね」と「よね」を区別できず、使用する場合も多いが、「よね」に関する研究は、それほど充分とは言えない。

そこで、本稿では大曾(1986)の「コメント」用法に当たるタイプの「ね」と「よね」を「評価」用法と呼び、ポライトネスの概念を援用して考察することを目的とする。「ね」と「よね」の

文体的な変種とみなされている「な」や「よな」についても、若干みることにする。

2.先行研究と問題点

終助詞「ね」に関する研究は、細かい差異はあるが、話し手と聞き手の情報や知識に関わっているというのが先行研究における共通の見解である。話し手・聞き手における「絶対的な情報帰属」(大曾1986、益岡1991)や、「相対的な距離」(神尾1990)、「量的な情報帰属」(金水1993、メイナード1993)のあり方と、使用される文末形式「ね」と「よ」の対応関係が考察されている。しかし、これらの説は「同意要求」や「確認要求」のような典型例を説明するのに有用である。

一方、終助詞「よね」に関する研究としては、伊豆原(1993)、蓮沼(1995)、野田(2002)、深尾(2005)、吉田(2008)などが挙げられる。順に見ていくことにする。

2.1.伊豆原(1993)

伊豆原(1993)は、「よね」を「聞き手に対する配慮とそれ故の不確かさの表明・聞き手への確認がそこにある」と述べている。すなわち「話し手が、相手の持っている知識・情報に配慮し、相手に関する自分の知識・判断に確信がないとき、また相手に配慮するが故に自分の方は不確かだということを表明しておきたいとき、「よね」が使われる」としている。

具体的には、(3)を例にとって「ね」と「よね」の違いについて次のように説明している。両者ともに、同意・確認求めであるが、「お医者さんはもうかりませんね」というとき、聞き手が話し手の考えに賛成するのは当然だという意識、聞き手もそう考えるだろうという話し手の推測、賛成してほしいという働きかけがそこにある。したがって、聞き手側のことに踏み込みすぎるという感じがする。「お医者さんはもうかりませんよね」では、その発話内容は聞き手のものであるという配慮が働き、あくまでも聞き手への同意求め・確認がその使用にある。言い換えると「お医者さんはもうかりませんよね」は、話し手の「聞き手の知識への配慮」「不確かさの表明」それ故の「聞き手への確認」になっているとしている。

(3) 増田：…確かに医者は患者でメシ食うのに、患者減らす仕事を医者やるのはおかしいのかなという、ね。

アナウンサー： 確かに(え)健康管理を進めればお医者さんは要らないわけですから(そう いうことですよね) お医者さんはもうかりませんよね、これ。

2.2.蓮沼(1995)

蓮沼(1995)では、「「よ」が「ね」と結び付くと、「よ」の意味は「はずだ」に極めて接近する」ということを指摘しており、「当然性」が「よね」にあるという点で、伊豆原(1993)と反対の立場だと言えよう。

また、「よね」に固有の確認用法を「相互了解の形成確認」と呼び、例えば、(4)は話し手と聞き手の共存する過去の経験を表し、(5)は世間一般の人々が共有していると考えられる一般通念を表す。これらはいずれも聞き手の認識を促し、その成立状態を確認していると述べている。

(4) 同級生に加藤さんっていたよね。

(5) A: 子供って、みんなカレーが好きよね。
B: そうね。家の子もみんな好きだわ。

2.3.野田(2002)

野田(2002)でも、「よね」は、文の内容を、当然そうであるはずのこと、正当なこととして示したうえで、それと聞き手の知識との一致を問いかけるとき、聞き手の認識との一致を促すとき、聞き手の認識との一致を表明するときなどに用いられるとし、蓮沼(1995)とほぼ同様な立場をとっている。

例えば(6)では、当然そうであるはずだという見込みをもって確認することが、「よね」によって示されており、「よ」によって、「当然そうであるはずだ」という話し手の見込みが表され、「ね」によって、その見込みと聞き手の知識との一致がといかけられていると述べている。

(6)「チケット、知らないわよね？」
唐突に言われて僕は我に返った。
「は？」
「私の机の引き出し、開けないわよね？」

ただし、(6)の「唐突に言われて」という表現から、窺えるように、「チケット、知らないわよね？」と言われると、なぜ、聞き手側は唐突な感じがするのか、唐突な感じは「評価」する場合にも現れるのか、などが疑問に思われる。

2.4.深尾(2005)

深尾(2005)は、複合形「よね」には話し手の判断について、確かさ、または不確かさを伝えようとする意味はないという観点から、「よね」は自分の意見を提示し、相手の助けを借りて結論を出そうとする話し手の心的態度の表明であるとしている。

(7) (レストランで一口食べて)
女：どう？
男：うん、うまいよ、これ。
女：だよね。わたしもすごく好き。(「マイリトルシェフ」TBS)

そして、(7)では女の「だよね」に「よね」が使われているが、これは「うまいよね」の意味である。女は「うまい」と話し手の意見を提示し、それが相手の助け(意見)を借りて出した結論であるということを示すために「よね」が使われているとしている。また(8)では、話し手は「非常に遅い」という意見を提示し、その是非について、相手の助け(意見)を借りて結論を出そうとしていると述べている。

(8) 久利生検事：皆、遅いよね。今日でしょう、俺の歓迎会って？
(しばらくたって)
久利生検事：非常に遅いよね-。(「HERO」フジテレビ)

しかし、(8)では、久利生検事が自分の歓迎会に現れない他の同僚について、しびれを切らせて言う場面である。ここで相手の助け(意見)を借りて結論を出そうとしているのは、「非常に遅いかどうか」ではなく、「俺の歓迎会が今日なのかどうか」であるように思われる。

2.5.吉田(2008)

吉田(2008)も、蓮沼(1995)や野田(2002)と基本的に同じ立場である。複合終助詞「よね」は、発話場面では当然性・共通性という意味を基盤としながら、命題情報の性質により「よ」「ね」各々の意味が卓立する現象が認められるとしている。

そして、男性の会話では、「よね」とほぼ同じ意味で「よな」が使用されることが多いことを指摘している。男性に比べ女性の「よな」の使用例は圧倒的に少ないとし、次の3例を挙げている。(9)(10)は、話し手の思いを独自的に述べる場面で、女性は独り言的な話し手の感情表出が主たる使用であり、(11)はユニセックス的な人物表現のために女性がわざと男性的な「よな」を使用した特殊な例である、と述べている。

(9) おタケさんは優秀だよねー。ときどきいやになっちゃうよな。

(10) たしかにこのままの状態に甘んじるつもりはないんだよな。

(11) フツー逆だろ？ どっちにしても弁護士ヅラじゃねえよな。

2.6.問題点

前節で、概観した先行研究をふまえた上で、検討する必要のある問題点を整理すると、以下のようになる。

① 「ほう、これはなかなかいい出来だよね」の「よね」は、なぜ許容度が落ちるのか？

② 「チケット、知らないわよね？」と言われると、なぜ、聞き手側は唐突な感じがするのか？

3.ポライトネス

ポライトネス(politeness)とは、会話において、話者と相手の双方の欲求や負担に配慮したり、なるべく良好な人間関係を築けるように配慮して円滑なコミュニケーションを図ろうとする際の社会的言語行動を説明するための概念である。

グライスの協調の原理がコミュニケーションの成立そのものを目的とする原理であったのに対し、それとは別の目的、すなわち、対人関係をよりよいものにしたいという高度な配慮をもってなされる言語行動の原理について、リーチはポライトネスの原理として論じた(Leech 1983)。具体的には自己と他者の利益・負担などに配慮して行われる言語行動の原理を、6項目として立てている。以下は6項目のポライトネスの原理(politeness principle)である。

① 気配りの原則 (tact maxim)

(a) 他者の負担を最小限にせよ

(b) 他者の利益を最大限にせよ

② 寛大性の原則 (generosity maxim)

(a) 自己の利益を最小限にせよ

(b) 自己の負担を最大限にせよ

③ 是認の原則 (approbation maxim)

(a) 他者への非難を最小限にせよ

(b) 他者への賞賛を最大限にせよ

④ 謙遜の原則 (modesty maxim)

(a) 自己への賞賛を最小限にせよ

(b) 自己への非難を最大限にせよ

⑤ 一致の原則 (agreement maxim)

(a) 自己と他者との意見差異を最小限にせよ

(b) 自己と他者との意見一致を最大限にせよ

⑥ 共感の原則 (sympathy maxim)

(a) 自己と他者との反感を最小限にせよ

(b) 自己と他者との共感を最大限にせよ

Leech(1983)のポライトネスの原理における６つの下位原則のうち、本稿と関連するのは、「他者への非難を最小限にし、他者への賞賛を最大限にせよ」という「是認の原則」である。以下では「評価」を≪賞賛≫と≪非難≫に分けて考察する。

4.≪賞賛≫にみられる「ね」と「よね」

終助詞「ね」は命令形以外に幅広く接続し、命令形には接続しないという点で、「よね」と共通する。「ね」と「よね」は≪賞賛≫にも用いられるが、以下のように「よね」より「ね」の方が多くみられる。このような事実は、「よね」には例文(2)のような制約があることと、関連するかのように思われる。

(12) 東京でそのスーツを着ると、みなが、
「ハヤシさん、カッコいいね」
と誉めてくれたものだ。 (「美」p.171)

(13) ごくたまにであるが、時間をかけてメイクをしていくと、
「化粧うまいね」
と誉められることもある。(「美」p.151)

(12)(13)は、各々「と誉めてくれたものだ」や「と誉められることもある」という表現から、聞き手のスーツやメイクをほめているということがすぐ分かる。(14)も同様な例である。

(14)「あのずいぶん色がお黒いですね」
「あ、これテニス焼け」
「でもなんですな、そ、それくらい黒いと南洋じゃもてるでしょうね」
「なんであたしが南洋まで行かなくちゃならないのッ」
「し、しかし、イ、イメージが少々違いますね」
「それ、誉め言葉？」
「も、もちろん。お美しくていらっしゃる。つ、つまり、作家にしてはという意味ですが」

(「恋」p.199)

(15)「そうよ。家庭は大事にしなくちゃ。そのうち部長さんも歳とったらきっとわかるわよ。歳とった時に信頼できるものは、三つだけだって」
「ほう……？」

「老いた妻、老いた犬、それに若干の貯蓄」
「なるほど。キミ、たいしたもんだね……」
「フランクリンの言葉よ」
「それにしてもさ……なんでもよくわかっているんだね」

(「恋」p.59)

(14)(15)のように≪賞賛≫を表わす「ね」の文で、「ずいぶん」「よく」のような程度副詞を共に用いることがよくある。リーチの原則で考えると、「是認の原則」の「他者への賞賛を最大限にせよ」を実現するために用いれらていると考えられる。以下の同様な例である。

(16)「つまんない話題をふっちゃったみたいだね」
柿崎の言葉に萌は顔を向けた。
「どうして？」
「急に無口になった」
彼の探るような目に、つい、意地悪くなった。
「あなたって、意外と気が小さいんだ」
柿崎は怒ると思ったが、そんな素振りは少しも見せず、却って、あっさり負けを認めるように肩をすくめた。
「気になる女性の前では、男なんてみんなそうだよ。と、一般論に持っていこうとするところが、まさに証明している」
萌は思わず笑いだした。
「あなたって相当したたかよね」
「どうして？」
「どんな皮肉を向けられても、機嫌を悪くしたりせず、最後はちゃんと笑いに持ってゆくの。女を笑わせたら、男の勝ちだものね」

(「肩」p.109)

(16)も≪賞賛≫を表わす文である。「あなたって相当したたかよね」の「よね」も、「相当」のような程度副詞を共に用いて、聞き手への高い評価を示しており、その点で「ね」と共通するように思われる。しかし、例えば「あなたって相当したたかよね」では、「あなたって、意外と気が小さいんだ」という否定的な評価が伝達された後の肯定的な評価、つまり再評価が「よね」を伴って聞き手に伝達されており、その点で「ね」と異なるように思われる。また、「どんな皮肉を向けられても」と書いてあることから分かるように、「あなたって、意外と気が小さいんだ」という否定的な評価は「皮肉」として用いられているように思われる。

次は聞き手に否定的な評価を示す≪非難≫についてみることにする。

5.≪非難≫にみられる「ね」と「よね」

≪非難≫と≪賞賛≫の差異について山岡他(2010)では、

(17) 君は実にすばらしいタイピストだね。
(君は間違いだらけのひどいタイピストだね：発話の効力)

(17)のように、職場の上司が部下の作成した書類を見て、短時間に一つのタイプミスもない書類を作成したことを誉めたとすれば、この発話は≪賞賛≫ということになり、意義

と効力のギャップは少ない。しかし、タイプミスだらけのひどい書類を見て、このように言ったとすれば、実際はまったく正反対の≪非難≫ということになる。このように≪非難≫を言うときに直接的な表現を避けて、遠回しに行う表現技法は皮肉(irony)と呼ばれる。

また、皮肉は「相手に対する配慮に基づく表現技法である。直接的であれ、皮肉であれ、相手に対する≪非難≫という目的は共通しているが、相手の欠点を直接的に表現することは、その話者が精神的な負荷を負うため、それを避けて遠回しに相手の欠点に言及し、相手自身がそれを自覚するよう示唆することで、結果として、相手に改善を求める機能を果たす」としている。

(18)アメリカでは、離婚はごくふつうのことであるから、ここで前の奥さんとは別れ、再婚をする。ぐっとグレードアップされた女性が、彼の新しい奥さんになる。これがトロフィー・ワイフ ですね。トロフィー、つまり人生のご褒美。
「よく頑張ったね」
と、神様から手渡されるニューワイフ。

(「美」p.29)

(19)さっき一件落着って言いましたよね。
え、うん。
よくそんな時代劇みたいなこと言えますね。
だって、落着は落着じゃ。

(「できちゃった結婚」ドラマ)

(18)と(19)を比較してみると、前者の「よく頑張ったね」は≪賞賛≫を表わしているのに対して、後者の「よく」からは、むしろ「反語的」な意味が読み取れる。

(20)「知らなかったわ。捜査一課のモサが金槌なんて……」
「よせよ。まわりに聞こえるじゃないか」
「泳げない癖に、よくもまあプールなんかへ誘えたものね。あつかましい……」
「てっきり、オリーブも同類だと思ったんだよ」
「失礼しちゃうわ。これでも高校時代は新体操と水泳の選手だったのよ」
それは嘘だった。

(「殺」p.183)

(21)「あたしの誕生日もうじきよ。プレゼント、何を買ってくれんの」
長原はきょとんと美登里の顔を見つめた。なぜこんなことを言い始めたか、全く見当がつかないらしい。
「冗談はよしてくれよな」
ややあって彼は口を開いた。咀嚼途中の飯粒が口の中でぐるぐるまわっているのが見える。
「オレが金を持ってないの、君だってよく知ってるだろ。よくそんなこと言えるよなあ」
「なによ、その言い方」
美登里はその湯呑みを強く手ではらった。茶碗はしぶきを散らしながら床に落ちていった。

「お前……。このヒステリー」

(「最」p.35)

(22) 周りの生徒たちはしばらくぼんやりと萌の行動を眺めていた。そうしているうちに、男の子のひとりが萌をはやしたてた。
「おまえ、よくそんな気持悪いことやれるな。ゾンビだろ」
飼育係の男の子だった。萌はゆっくりと小屋から出て、その男の子の前に立ち、激しくビンタした。
「ふん、臆病者が」

(「肩」p.268)

(20)(21)(22)でも、(19)と同様に、聞き手の欠点を直接的に表現することを避けて、遠回しに表明することによって、摩擦を緩和しようとする対人配慮のストラテージとして反語的な意味を有する「よく」とか、終助詞「ね」「よな」「な」などが用いられたように思われる。

(23)「日本料理ねぇ…。ちょっと辛気くさいなあ。フランス料理とか、イタリア料理でどっちかないの」
「林さんも遅れてるなあ」
原田青年は電話口で笑った。こういうことを平気で言うから、若いコにモノをたずねたくないのだ。
「いまね。一番すすんでる人たちはみんな日本料理ですよ」

(「街」p.220)

(24)「水漬けといいますと、どのような処罰法ですか」
藤川が課長補佐の背中に向って訊いた。
「小説家のくせに君もものを知らん男だねえ」

(「四」p.19)

(25)「ねぇ、これ絶対に秘密なんだからさぁ、誰にも言わないでぇ、いい?約束する?」
ノブコはさも重大なことのように声をひそめた。
「前々から怪しいとは思っていたのよね、テニスのコーチと林さん。それがやっぱり勘が的中、見ちゃったのよね、あたし、浮気の現場」
……。 ……。
「いいわ、約束する」とA子が答えた。
「もちろん、誰にも言わないわよ」とB代も言った。
「林さんもやるわねぇ。でもここだけの話にしましょうね」とC子も請けおった。

(「恋」p.299)

(23)(24)(25)は、いずれも話し手が聞き手を否定的に評価している例である。いずれも「林さんも遅れてるなあ」「君もものを知らん男だね」「林さんもやるわねぇ」のように、終助詞「ね」や「な」が、「は」の代わりに、ぼかしを表わす「も」とともに用いられ、≪非難≫を婉曲的に示していることが分かる。

(26)「きみぐらい冷たい人はいないね」
「あたしぐらい冷たい人はいないの」

(「ボ」p.17)

(27)「そんな顔をして人を見るもんじゃないよ」
縁川はおかしそうに笑った。
「そういうところが君はまだまだネンネなんだよなあ。まあいい、まあいいさ。評判が悪いってことはそれだけ気にかかるっていうことなんだから。小説家にとっていちばんの酷評は無視ということなんだ。それだけは覚えときなさい」
(「最」p.73)

(26)も聞き手を否定的に評価している事例である。≪非難≫による摩擦を緩和するために、「非常に冷たい」という直接的な表現を避けて、「ぐらい～ない」のような表現が「ね」とともに用いれらたように思われる。(27)も≪非難≫を表わすのに「よな」が用いられている。

整理すると、「ね」「な」「よな」は、反語的な意味を有する「よく」とか、ぼかしを表わす「も」とともに用いられ、≪非難≫を婉曲的に示したりしていることが分かった。このような事実は、「他者への非難を最小限にせよ」というリーチの「是認の原則」とも関連するものだと思われる。

6.おわりに

以上、大曾(1986)の「コメント」用法に当たるタイプの「ね」と「よね」を「評価」用法と呼び、ポライトネスの概念を援用して考察した。その結果、終助詞「ね」と「よね」は、聞き手に対する対人配慮の機能を有するという点で共通しながら、両者間の微妙な差異があることが分かった。まとめると次のようである。

まず、「ね」と「よね」は≪賞賛≫に用いられるが、「よね」より「ね」の方が多くみられた。このような事実は、「よね」には例文(2)のような制約があることと、関連するように思われる。また、その出現状況を見ると、聞き手への2度目の評価、つまり再評価が「よね」を伴って聞き手に伝達される場合があり、その点で「ね」と異なるように思われる。

次に、≪賞賛≫にみられる「ね」と「よね」は、「とても」「随分」「相当」のような程度副詞を共に用いることがよくある。リーチの原則で考えると、「是認の原則」の「他者への賞賛を最大限にせよ」を実現するために用いれらていると考えられる。

一方、≪非難≫には「よね」の代わりに「よな」が用いられるという傾向が見られた。≪非難≫にみられる「ね」「な」「よな」は、反語的な意味を有する「よく」とか、ぼかしを表わす「も」とか、「ぐらい～ない」のような表現とともに用いられ、否定的な評価を婉曲的に示したりしていることが分かった。このような事実は、「他者への非難を最小限にせよ」というリーチの是認の原則と関連するものだと思われる。

以上の結果は、命令形には「よな」が使用され、「よね」が使用できない場面を、「よね」の変種である「よな」により補っているという事実とも関連すると言えよう。

参考文献

安達太郎 (1999)『日本語疑問文における判断の諸相』 くろしお出版
泉子・K・メイナード (1993)『会話分析』くろしお出版
伊豆原英子 (1993)「終助詞『よ』『よね』『ね』の総合的考察―『よね』のコミュニケーション機能の考察を軸に―」『日本語・日本文化論集 1』 名古屋大学 pp.21-34

井上優 (1999)「状況認知と終助詞―『ね』の機能」『日本語学 18-8』 明治書院 pp.79-86
宇佐美まゆみ (1999)『女性のことば·職場編』現代日本語研究会編 ひつじ書房
大曽美恵子 (1986)「誤用分析 I 『今日はいい天気ですね。』―『はい、そうです。』」『日本語学 5-9』 明治書院 pp.91-94
片桐恭弘 (1997)「終助詞とイントネーション」『文法と音声』くろしお出版
神尾昭雄 (1990)『情報のなわ張り理論―言語機能的分析―』 大修館書店
金水敏 (1993)「終助詞ヨ·ネ」『月刊言語 22-4』 大修館書店 pp.118-121
金玉任 (2006)「終助詞『ね』の機能―「評価文と『ね』―」『日本語学研究 15』 韓国日本語学会 pp.25-38
佐治圭三 (1957) 「終助詞の機能」『国語国文 26-7』
下山千秋 (1995)「文末における『よね』―『ね』と比較しながら―」『名古屋大学言語文化部ことばの科学』pp.51-66
定延利之 (1995)「談話における心的操作モニター機構―心的操作標識「ええと」と「あの(一)」―」『言語研究 106』
田野村忠温 (1988)「否定疑問小考」『国語学 152』国語学会 109-123
鄭相哲 (1992)「いわゆる確認要求の『ネ』と『ダロウ』」『日本学報 11』大阪大学文学部日本学科
陳常好 (1987)「終助詞―話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞」『日本語学 6-10』明治書院 pp.93-109
寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版
中右實 (1979)「モダリティと命題」『日本語と英語と』くろしお出版
野田恵子 (1993)「終助詞『ね』と『よ』の機能―『よね』と重なる場合―」『言語文化と日本語教育』お茶の水女子大学日本言語文化学研究会
蓮沼昭子 (1995)「対話における確認行為―『だろう』『じゃないか』『よね』の確認用法―」『複文の研究(下)』くろしお出版
深尾まどか (2005)「『よね』再考―人称と共起制限から―」『日本語教育 125』日本語教育学会 pp.18-27
益岡隆志 (1991)『モダリティの文法』くろしお出版
三宅知宏 (1996)「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育 89』 日本語教育学会 pp.111-122
宮崎和人 (1993)「『～ダロウ』の談話機能について」『国語学 175』
_____ (2000)「確認要求表現の体系性」『日本語教育 106』 pp.7-16
_____ (2002)「終助詞『ね』と『な』」『大阪日本語研究 14』 pp.1-19

用例出典

[四] 井上ひさし (1984) 『四捨五入殺人事件』 新潮社
[街] 林真理子 (1984) 『街角に投げキッス』 文春文庫
[最] 林真理子 (1988) 『最終便に間に合えば』 文春文庫
[美] 林真理子 (2003) 『美女のトーキョー偏差値』 角川文庫

[ボ] 星新一 (1971) 『ボッコちゃん』 新潮社
[恋] 森瑤子 (1988) 『恋のインデックス』 角川文庫
[殺] 山村正夫 (1987) 『殺人レッスン休講中』 角川文庫
[肩] 唯川恵 (2004) 『肩ごしの恋人 』 集英社文庫
＜ドラマ＞ 『できちゃった結婚』フジテレビ
＜ドラマ＞ 『HERO』フジテレビ

（金玉任、誠信女子大学日語日文学科教授、olkim@sungshin.ac.kr）